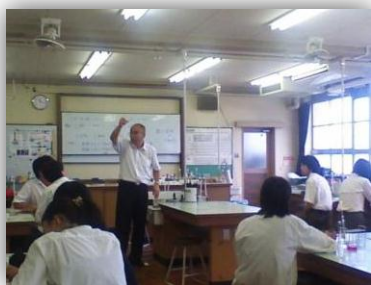


## 校長の自慢 『実験こそ理科』

西淀川高校の理科には「何でも試そう 実験100回」という伝統がありました。

中学校の時は友だち任せの実験だったため、顕微鏡も覗かず、マッチも擦らず、試験管も振らずの生徒が多数いるのが本校の実情です。また、いろいろな課題を抱えた生徒が多いのも事実です。そんな生徒に対して、3年間で出来るだけ多くの実験を目標にして授業展開しているのが理科の先生たちです。



浜口教諭は、生徒たちにできるだけ場数を踏ませるように実験を行っています。細胞分裂の観察・原形質分離の観察・中和滴定・テルミット反応・ロケット爆発・炎色反応固定燃料・・・等実験内容は多岐にわたります。教室と実験室では、やはり生徒の反応が違います。興味・関心を刺激され、生徒たちはやる気が出てきます。平易な言葉で難しい実験内容を説明しますし、指示も明確です。ただし、

「オイ、危険やぞ！」

と注意喚起も行い、安全な実験に導く浜口教諭のスキルには見習うべき点がたくさんあります。



西田教諭は、毎年「眼球観察」を行うために豚の眼球を生徒分準備します。

「絶対無理～！」

と言っていた生徒たちも本物の魅力に取りつかれて素手とハサミを使って、眼球を取り出します。最後には摘出した生のレンズを



手にしてプリントの字が拡大されるのに驚き、目の機能を理解できたようです。



実験は実験室だけで行うものではありません。藤森教諭は、教室に「仕掛け」を持ち込みます。物理分野の力学は、板書だけでは理解が深まりません。そこで、黒板に滑車やバネばかりを引っ掛け、実際の数値を生徒に示します。あるいは生徒にバネばかりを持たせてその力を体験させています。そこで滑車の作用についての理論と実際が一致します。

いろいろな実験や実習を通して、基本的な知識を獲得して、科学的な思考力や判断力が身についてくれることを担当者は心から願っています。次代のリケジョ（理系女子）が現れることも期待しています。